



A



B

BRAIN and NERVE 69 (6) : 676-677, 2017

今月の表紙

河村 満^{a)}*

岡本 保^{b)}

菊池雷太^{c)}

いったいなんの写真でしょうか。バトントワリングの練習でもしているのでしょうか。

まず彼が何をしているのか原文をみてみましょう。

ステッキを用いた練習は2つの動作から構成される：1つは前述と同様な練習で、手背にステッキを載せ、空中に放り出し、それを手でつかまえる。もう1つは、ステッキを中指と薬指の背面に置き、人差し指と小指がステッキの上に乗るようにする(写真A)。この配置は、手、前腕、上腕が完全に伸展した状態で、中指と薬指の伸展、示指と小指の屈曲によって安定する。すなわち、患者は少しの間、腕を伸ばしたままである。その後、手の尺側縁の周りにステッキを回転させ、次に、ステッキの位置を変え、ステッキが示指と小指の背面上に乗るように

し、中指と薬指をステッキの上に乗せる(写真B)。こうすることで、示指と小指の伸展、中指と薬指の屈曲が得られる。交互にいろいろな指が伸びるようにステッキの位置の変換を何回も繰り返す。

つまり、腕を伸ばした状態で、母指以外を繰り返し伸展、屈曲させるためにステッキを使用しています。何かのリハビリテーションのようですが、いったいなんの疾患でしょうか。

この写真が掲載された論文のタイトルは「職業性攣縮 — その系統的マッサージとリハビリ療法」¹⁾といい、ステッキを用いて行われていたのは書痙の治療です。

この論文では、まず職業性攣縮の病態についてこれまでの知見を概観し、そのうえで著者の見解を述べています。デュシェンヌ=ド=ブローニュ(Guillaume Duchenne de Boulogne : 1806-

1875)はこの疾患を機能性攣縮と呼び、痙縮型と麻痺型の2型に分類したうえで、脳障害が原因であるとしたこと、さらにそれぞれ別の研究者が振戦型、運動失調型(反射性攣縮型)を記載したことなどが書かれています。

その後、著者独自の見解として、脊髄癆の歩行運動失調とのアナロジーから職業性攣縮を「職業性運動失調」と解釈していることが述べられます。

職業性攣縮の中樞の局在がどうであれ、著者の見解は、攣縮は職業性運動失調の性質を有し、脊髄癆の歩行運動失調と同様である。すなわち、歩行運動失調が動作中に出現するように、文筆家は書字に際して、音楽家は演奏時に症状が明らかとなる。デュシェンヌ=ド=ブローニュをはじめ大多数のフランスの研究者らは、職業性運動失調の原因は中枢神経系の変化によると

a) 奥沢病院名誉院長, b) 富坂診療所, c) 汐田総合病院神経内科

*[連絡先] kawa@med.showa-u.ac.jp



C



D

考えている。

（中略）中枢性病理解剖学的病変の存在を明示することはほぼ不可能であるが、反対に、職業性攣縮が書字の協調運動障害であることを証明することは脊髄癱患者の失調性歩行が歩行中の下肢の協調運動障害であることを証明するのと同じ程度に、非常に簡単である。

現在、書癱は局所性、動作特異性ジストニア／ジストニーと考えられており、この協調運動障害＝運動失調と捉える考え方には斬新さと奇異さを感じます。

本論文には、ステッキ以外にも、いくつかの書癱の治療法が紹介されています。1つ目は、マッサージです。筋緊張低下のみられる伸筋群にマッサー

ジを行い、筋緊張亢進のみられる屈筋群には何もしないことで、伸筋群のトーンスが上昇し、拮抗する両筋群のバランスが回復するとあります。現在行われているボトックス治療では、亢進した筋トーンスを下げることでバランスをとっており、真逆のアプローチと言えます。

2つ目は「重り引っ張り法」で、指の先に重りのついた紐をくくりつけ、上下に上げ下げします（写真C）。25～50 gの軽い重りから始め、徐々に400 g程度まで重くしていきます。これを各指順番に行うとあります。

3つ目はボール訓練法です。指の背側にボールを載せ、その状態からボールを放り出し、手でキャッチします。そこからまたボールを放り、今度は背側の示指と中指の間、または中指と薬

指の間でキャッチします。同様の訓練は前述のステッキや硬貨でも行うことができます。

4つ目として、書字のリハビリテーションとして「逆転した手」で書く方法があります（写真D）。これは、書くことのリハビリテーションだけではなく、攣縮状態の筋肉を不活化させることを目的としたようです。方法は、ペンを手の甲側に出し、机に手の甲をつけて書くというものです。逆転した手で楽に書字が行えるようになったら、通常の肢位での書字を繰り返します。

現代の治療法からすると、ずいぶん素朴な方法にもみえますが、論文の最後には、「われわれの方法はどのタイプの書癱でも同等に有効である」とあり、その効果にはかなりの自負を持っていたことが伺えます。

文献

- 1) Kouindjy P: La crampe professionnelle. Et son traitement par le massage méthodique et la rééducation. Nouv Iconogr Salpêtrière 18: 215-231, 1905